



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第一五五号〜

小満 しゅうまん

五月二日

徳力富吉郎版画館



つくばいの水音が響く館内。賑やかなおかげ横丁の中で静かな空間が広がるのが、徳力富吉郎版画館です。茶室をアレンジした喫茶室に腰掛けると、ゆったりとしたときが流れます。「お茶をどうぞ」と同館の濱口弘美さんが、珍しい熊笹のお茶「笹湯」を入れてくれました。さっぱりとしたお茶です。血液をさらさらにする成分が入っているので、体にも良いとか。疲れたときの一服に癒されます。

徳力さん（一九〇二〜二〇〇〇）は、赤福餅の箱に入っている菜「伊勢だより」の版画を制作した版画家。徳力家は西本願寺絵所の家系で、富吉郎さんは古くから京都で製作されていた木版画に近代感覚を加えて「徳力版画」を生み出しました。同時代に活躍した版画家の棟方志功氏とともに海外で二人展を催すなどして版画の普及にも一役買っています。

徳力版画の特徴は、なんとといってもその色の多彩さ。色板を何十枚も刷り重ねる多色刷りの技法が、伊勢の四季折々の風景を豊かなものにしていきます。

ここの伊勢だよりはがきは一〇五円と手ごろで、私も何枚か持っています。が、絵柄は一〇〇種類を数えるといえます。人気はやはり宇治橋、内宮、外宮、そして夏は宮川花火、お正月は伊勢えびが刷られたものだそうです。

近頃、目を引くのは、版画紙箱の「おはこ」シリーズ。花など季節の風物が刷られた小箱と、黒こんべい、そば茶、メモ帳などの中身を組み合わせるもの。「おかげさま」や「心ばかり」の言葉シリーズもあり、ちょっとしたお礼の品にもなりそうです。また使用後も小箱として再利用できます。差し上げる方を思い浮かべて、さまざまにアレンジできる「おはこ」は、暮らしの中で版画を楽しめるひと品です。

文 千種清美

